(9) モルタルをつめる。

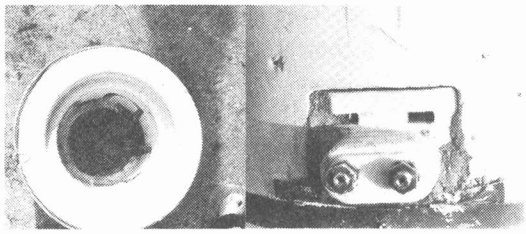
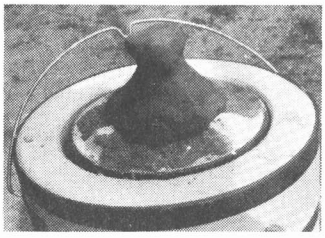


写真13　モルタルをつめたところ

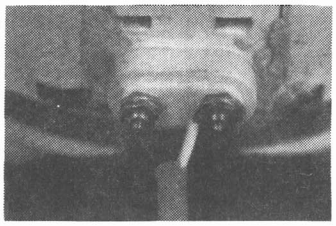
窯底と端子のすき間にはモルタルをつめる。底は凸凹をなくし平らにならす。

(10) 上蓋(ふた)をふさぎ持ち蓋（色見ぶた）をつくる。



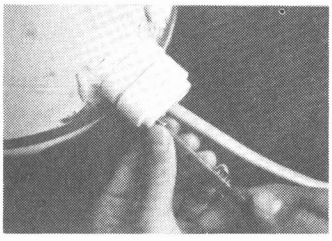
コンロのふたには，真中に直径5cmの穴と，周囲に9つの小穴がある。小穴はモルタルで，真中の穴には写真右のように，取手（とって）のついた粘土の塊(かたまり)でふたをする。これを持ち蓋とする。

(11) コード（長円形コード・15A用）を取りつける。



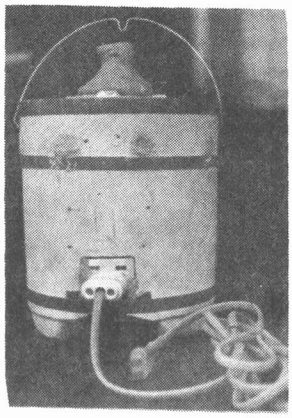
耐熱端子にコードを接続するが，接続端子のコードの先端には，できれば圧着矢形チップをつけて接続すれば申し分がない。もしなければ，ていねいに銅線を鍵状にまるめ，はずれないようしっかりナットで止める。ここが最も肝心な所で，ぐらぐら動いたり，線が外れると短絡する危険性があるので注意が必要である。

(12) 端子カバーをしてネジ止めする。



これで器具の取りつけは全部済みですが，コンセントと端子のコードの中間に，できれば中間スイッチ（12A・250V／310円）を挿入してください。

これで全部完成です。写真で見ると何となく粗雑な細工に見えますが，陶芸窯に体裁は不要です。使用しているうちに愛着を覚えることでしょう。



4．使用法について

窯ができるとすぐ電源を入れたいところですが，モルタルや粘土が少し乾くまで半日くらい待ち，テスターで短絡の有無を確認したのち電源を入れてください。

(1) **準備**　ニクロム線が1KWの場合は10Aの電流が流れるので，電源コンセントが10A以上の許容電源であるかどうかを確かめ，床が不燃焼の場所，家ならば縁側や土間に煉瓦を置いて，その上で焼成する。そして，そばにはバケツに水，ヤットコ，ふたや被焼成物をおく煉瓦等の準備，手には軍手等の手袋を準備してください。窯が小さいので，この窯が工場等の炉の温度とほぼ同じだということを，つい忘れ勝ち(だ)です。くれぐれも「火の用心」を念頭に。

(2) **空焚き**　○スイッチONから5～10分間は湯気が上る。ときどき持ち蓋を取って水分を放出させてやります。　○20分後には，ニクロム線だけでなく，窯内が赤茶色になる。　○30分後，窯の周囲に触れると熱くなる。　○約1時間後には，ニクロム線と窯の色が一様に赤色になる。このときの温度は800℃ですが，蓋を取るとすぐ温度が下がります。

もし，手元にゼーゲルコーンやパイロメータ（熱電対温度計）があったら，時間対温度表を作っておくことをおすすめします。　○1時間後スイッチOFFにして自然冷却するか，楽焼の本焼または七宝焼をしてください。

(3) **その他**　○ニクロム線は焼成中，柔かくなり，溝からはずれることがあります。慌てずに電源を切って溝に戻してください。　○高価ですが「純ニクロム線」や「カンタル線」を用いると高温に耐えます。おわりに，具体的な使い方や製作技術等については，皆さまの創意工夫を待つ以外にありません。実践・改善等のご意見を賜われば幸甚です。